

早房D遺跡 発掘調査報告書

1988

山形県
山形県教育委員会

はや ぶさ
早房 D 遺跡
発掘調査報告書

昭和63年3月

山形県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和62年度に実施した県営圃場整備事業(富並地区)にかかる早房D遺跡の緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

今回の発掘調査は、農道にかかる限られた範囲であり、そのほとんどは現状保存が可能となりました。

早房D遺跡の所在する最上川左岸の富並地区は、特に遺跡の分布が多く、以前から耕作時に土器や石器などの発見で知られており、その数や地形から推測して先史時代の遺跡の宝庫とまで呼ばれている地域です。

これらの文化遺産は、私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできたものであります。祖先の歴史を知ることは、私たちの明日の道標を示唆するものと考えます。したがって貴重な文化財を愛護し、子孫へ伝えていくことも現代に生きる私たちの重要な責務と云えます。

近年、開発事業に伴い、地下に埋もれた埋蔵文化財とのかかわりも増加する傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の文化遺産である埋蔵文化財との間には、今なお多くの問題が介在しており、適切な対処が望まれているところです。

山形県教育委員会では「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境づくりという立場から、これらの間の調整をはかり、今後も埋蔵文化財の保護と活用のため努力を続けていく所存です。

終りに、本調査に御協力いただきました関係各位、地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対するおおかたの理解の一助となれば幸いです。

昭和63年3月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

例　　言

- 本書は山形県教育委員会が昭和62年度に実施した富並地区県営ほ場整備事業に係る「^{北東部}草房D遺跡」の発掘調査報告書である。現地調査は昭和62年10月15日から同30日まで延12日間実施した。
- 調査にあたっては、村山市教育委員会はじめ関係諸機関のご協力を得た。
- 調査体制は次のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員：佐々木洋治
(埋蔵文化財主査)、野尻侃

(主任技師)、現場主任：黒坂雅人(嘱託)

事務局 事務局長：後藤茂彌(文化課長)事務局長補佐：土門紹徳(文化課長補佐)事務局員：菅原徳嘉(芸術文化主査)、佐藤大治(文化財主査)、長谷部恵子(文化課主事)、氏家修一(文化課主事)

4 挿図の縮尺は各々スケールで示した。
5 本書は黒坂雅人が作成し、編集は阿部明彦が担当し、佐々木洋治が総括した。

目　　次

I 調査に至る経過	1	1 A 区	5
II 遺跡の立地と環境	2	2 B 区	7
III 調査の概要	3	V まとめ	12
IV 調査の成果	5		

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第6図 B区南東壁土層断面図	7
第2図 遺跡全体図	4	第7図 B区出土土器実測・拓影図	9
第3図 A区北西壁土層断面図	5	第8図 B区出土土器実測・拓影図	10
第4図 A区出土遺物実測・拓影図	6	第9図 B区出土石器実測図	12
第5図 30-40区北東壁断面図	7		

図版目次

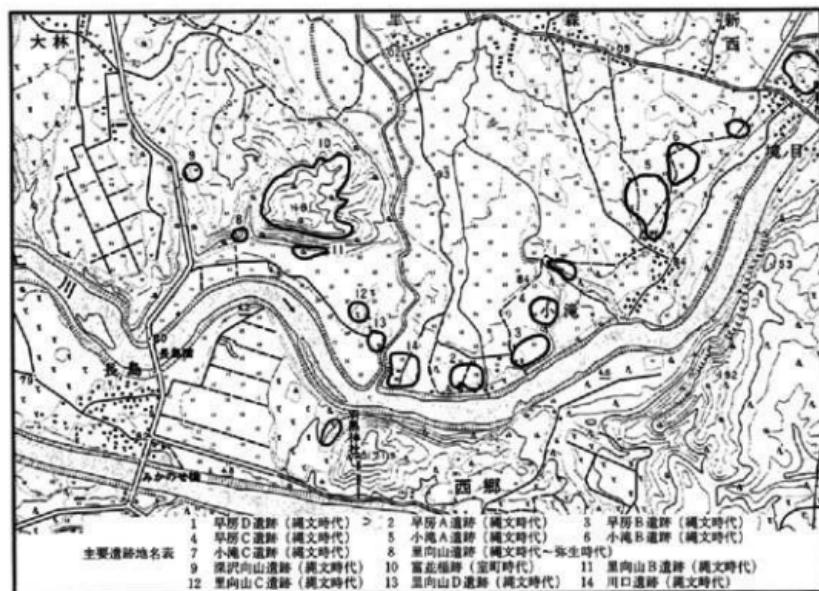
図版1 遺跡遠景	2	図版6 S D 1 完掘状況他	8
図版2 遺跡近景他	3	図版7 B区出土土器	10
図版3 A区全景他	5	図版8 B区出土土器	11
図版4 A区出土遺物	6	図版9 B区出土石器	12
図版5 B区全景他	7		

I 調査に至る経過

早房D遺跡は、昭和53年山形県教育委員会が実施した、広域営農団地農道整備事業による遺跡分布調査により新たに発見された。この時、富並地区南部の最上川左岸一帯には、新規発見10遺跡を含む14遺跡の存在も確認されている(第1図)。昭和62年、NTT株売却による富並地区県営ほ場整備事業が開始されることになり、事業実施区域内に本遺跡が含まれる可能性が生じた。県農林水産部から依頼を受けた山形県教育委員会は、昭和62年10月、遺跡詳細分布調査Bを実施し、事業地域内での遺物包含を確認した。

これに基づいて、山形県教育委員会では、山形県農林水産部、村山市教育委員会など、関係機関との協議を重ねた結果、記録による遺跡保存を目的とした発掘調査を緊急に実施する必要があるとの判断がなされた。

事業区域には遺跡範囲のほぼ全体が含まれるが、試掘の結果遺跡北半および南端部は開田の際に重機により地山まで削平を受けており、遺物は農道建設箇所にかかる東側部分および水田部分より一段低位の段丘面となる西側林地内から出土する。農道建設は、今回の工法上特に着工を急ぐこともあり、この部分を中心として昭和62年10月15日から10月30日まで緊急発掘調査を実施することとなった。



第1図 遺跡位置図(S=25000)

II 遺跡の立地と環境

富並段丘は、共栄付近から東西に大きく蛇行し、さらに白金付近で北西に流れを変える最上川と、大高根山地とにはさまれた地域に広がり、山形盆地と尾花沢盆地の境界となる狭窄部に発達している。その中心となる中位段丘は、富並川、最上川の合流点から北西は平林付近まで、北は田沢付近までV字形に広がっている。早房D遺跡は、この中位段丘面の南端、小滝地内の南西約400mに位置し、直線距離で南に約300mにある最上川に向かって舌状に張り出した段丘上に立地する。標高84mをはかり、現在の地目は水田・畑地・林である。

この中位段丘面南端一帯は、最上川三難所のひとつ「はやぶさの瀬」の急流による比高10~30mのきりたった段丘崖を形成し、その上には本遺跡をはじめとして多くの遺跡が点在している(第1図)。富並川と最上川の合流地点左岸の段丘上にあり、縄文時代後期(宮戸Ib式併行期)のまとまった資料を出土している川口遺跡(遺跡番号616)や、早房遺跡群などの縄文時代の集落跡の他、富並橋(遺跡番号616)など中世城館もあり、豊富な水系と背後の丘陵地帯の存在が、古くから交通・食糧確保等の面で人間の生活に適した環境を提供していたといえる。



図版1

遺跡遠景(西から)

III 調査の概要

発掘調査は昭和62年10月15日から10月30日まで延べ12日間行った。試掘調査の結果から、建設予定の農道のセンターをY軸30ラインにとり、 $2 \times 2\text{ m}$ のグリッドを設定し、それを中心に西側雑木林内に $11 \times 6\text{ m}$ 、東側水田部分に $32 \times 6\text{ m}$ の発掘区を設けて、それぞれA区、B区とした(第2図)。両発掘区とも表土を重機で耕土し、順次粗掘り、面精査、写真・図面等による記録と作業を進めた。グリッドY軸はN-39°-Eであり発掘面積は両発掘区合計で約 250m^2 である。

以下に発掘調査の経過を記す。

- 10月15日(火) 器材の搬入。午後鍛入式の後、発掘区縄張りとB区伐採木のかたづけ。
- 10月16日(水) 重機による表土剥ぎ取り。発掘区内杭打ちと面整理。
- 10月19日(土) A区杭打ちと第1回掘り下げ。試掘坑付近より土器片出土。
- 10月21日(月) A区面精査、壁面整理。B区30-41区深掘り。
- 10月23日(水) B区掘り下げと30-41区深掘り。
- 10月26日(土) B区面精査。30~33-37・38区より溝状遺構(S D 1)検出。A区セクション図作成。
- 10月27日(日) B区面精査とSD 1掘り下げ。南壁セクション図作成。
- 10月28日(月) B区レベリング、セクション図、平面図作成。
- 10月29日(火) B区セクション図注記。午後現地説明会。
- 10月30日(水) 器材撤収。



図版2

A区作業風景



B区作業風景



第2図

遺跡全体図

IV 調査の成果

1 A区

a 基本層序(第3図)

第3図はA区北西壁、28-13~16区の土層断面図を図示したものである。発掘区内での土層の堆積は、III層以下はほぼ水平であるが、I・II層は西に向かって若干傾斜し、Y-12以西ではII層が極端に薄くなる。各層の土色、土質は以下に示すとおりである。

Ia：開田の際の盛土

Ib：10YR2/1 黒色シルト(林内の表土、しまりなくボソボソする)

Ic：10YR2/2 黒褐色シルト(1段上位の段丘面からの流れ込み)

Id：10YR2/1 黒色シルト(Ic・IIa層間に不安定に堆積する。黄褐色シルト塊状に含む)

IIa：10YR1/1 黒色細砂質シルト(A区東半に堆積)

IIb：10YR2/1 黒色細砂質シルト(A区西半に堆積、しまりなく軟かい。遺物包含層)

IIc：7.5YR2/1 黒色シルト(遺物包含層)

III：10YR4/4 暗褐色細砂(漸移層、比較的しまっているが粘性弱い)

IVa：10YR6/6 明黄褐色細砂(地山。かたくしまっている)

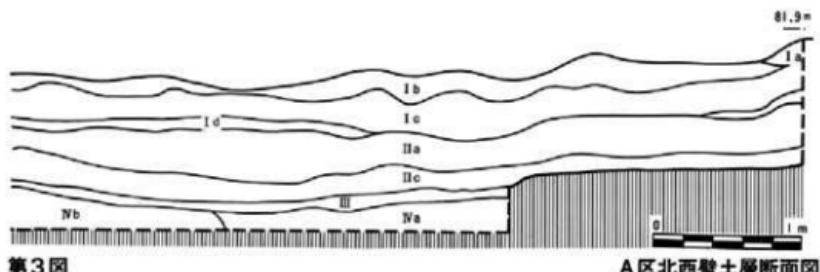


図版3

A区全景(北から)



A区北東壁土層断面



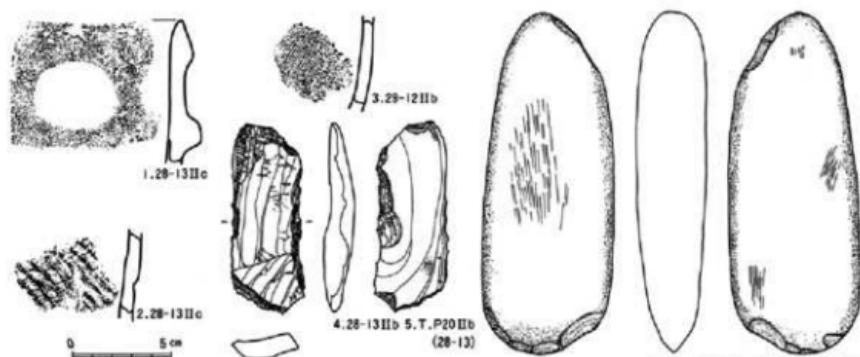
第3図

A区北西壁土層断面図

b 遺構と遺物(第4図)

A区ではI層を埋土した後、遺構検出作業をIII層上面まで行なったが、発掘区内から人為的な遺構は検出されなかった。

出土遺物は、28・29-12・13区IIb・IIc層を中心に縄文土器片4点、石器2点、剝片2点が出土した。1は口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させるが口唇を薄く整形し中央部に円形の凹みを連続させる。調整は丹念であるが焼成は良くない。縄文時代中期後半大木9式期の所産とみられる。2は単節L Rの縦位回転押捺、3は櫛齒状工具による斜方向沈線の施文された体部破片である。4は横剥ぎの剝片を利用した笠状石器である。バルブ側の側縁両面に大まかな二次調整がみられる。泥岩製。5は試掘の段階で出土した磨製石斧である。刃部両面に敲打痕があり、若干の磨痕がみられる他はほぼ自然面を残す。



第4図

A区出土遺物実測・拓影図



図版4

A区出土遺物(S=1/3)

2 B区

a 基本層序(第5図・第6図)

第5図は30-41深掘区、第6図はY-36~38南東壁の土層断面である。開田の際にIV層まで削平され、Y-36以東はその後に盛土されている。Y-38以東から地山は沢に向かって急傾斜する。深掘区内にプライマリーな堆積がみられたが無遺物であった。遺物は盛土Ib~Id層中から出土する。以下に土色・土質を記述する。

Ia : 7.5 Y R 2/1 黒色シルト(現耕作土)

Ib : 10 Y R 2/1 黒色粘土質シルト(III・IV層大塊を含む)

Ic : 10 Y R 1/1 黒色シルト(III層大塊を含む、軟弱)

Id : 10 Y R 3/3 暗褐色粗砂(III層中心の二次堆積)

Ie : 7.5 Y R 2/1 黒色シルト(バミス粒を含む、旧表土)

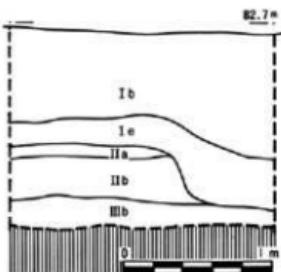
IIa : 5 Y R 3/1 黒褐色シルト(酸化鉄粒を多量に含む)

IIb : 10 Y R 2/1 黒色シルト(粘土塊、バミス粒を含む)

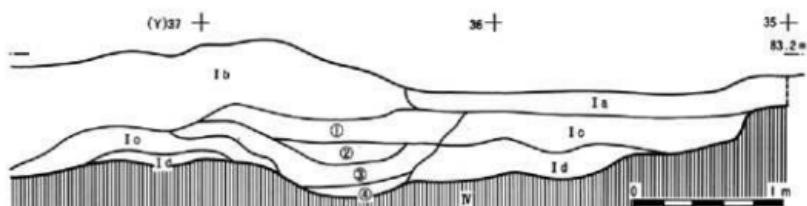
IIIa : 10 Y R 7/6 明黄褐色粗砂(かたくしまる。旧地山)

IIIb : 10 Y R 4/2 灰黄褐色粗砂(砂利多量、旧河床か?)

IV : 2.5 Y R 4/4 淡黄色粘土(粘性強、削平後の地山)



第5図 30-41区北東壁断面図



S D 1 極土
 ① 10 Y R 4/2 黑黄褐色粘土質シルト (含みバミス粒・細砂を含む、比較的しまっている)
 ② 10 Y R 2/1 黒色シルト (しまりなく軟かい)
 ③ 10 Y R 3/1 黒褐色粘土質シルト (バミス粒を若干含む、しまりなく軟かい)
 ④ 10 Y R 2/3 黒褐色シルト質粘土 (粘性強いがしまりがない)

第6図

B区南東壁土層断面図



図版5

B区全景(北東から)



30-41区南西壁土層断面

b 遺構と遺物(第7~9図)

30~33-37・38区より溝状の遺構(S D 1)が検出された。精査区内での長さ7.2m、幅80cm前後、確認面からの深さ40~60cmをはかる。ほぼ南北方向に直進し、底面に礫を含む。覆土内から磨滅した土器片が若干出土した。本溝跡はIc層・Id層を切っており、ごく近年に切られたものと考えられる。B区からその他の遺構は検出されなかった。

遺物は、30~33-36~40区内、Ic・Id層中から整理箱約2箱の縄文土器片、石器2点、剝片2点が出土した。出土した土器片は、縄文時代後期・晩期に属する粗製深鉢形土器がほとんどで、その他壺形土器の破片も若干認められるが、器面の磨滅が著しく、地文すら確認できないものが大半を占めた。従ってここでは挿図の解説のみにとどめる(第7・8図)。

1・3・4は櫛歯状工具により沈線を描出している。いずれも薄手であるが焼成不良である。この手の施文具を用いたものは他に数点みられたがいずれもかなり磨滅している。縄文時代後期の末から晩期初頭頃の在地的なものか。2・5・6・8・11・16・17は、地文のみ施された粗製深鉢形土器である。単節LR横位施文に結節を伴うものが多いが、17は無節R1原体を併用する。この土器における結節は無節の原体に伴うものである。8は径34cmをはかる大形の深鉢であるが、器厚は5mmと薄手である。地文は条の細い原体を用い、結節は二重になっている。10は頸部がくびれる器形の粗製深鉢形土器で、地文にLR単節の横位施文、頸部には径2cm程の貼りコブがみられる。12・13は同一個体である。波状線を呈し、口縁部には無文地に沈線で三叉文の施される深鉢形土器であるが口縁部が無文地のままである。7・15は壺形土器である。両者とも磨滅が著しくモチーフは判然としない。7は体部下半無文地に沈線で区画された体部上半に磨消縄文と沈線で文様を描出する大形の壺である。9は網代底をもつ底部破片である。

石器(第9図)は縦剥ぎ剥片を用い周辺部両面に二次調整を施す1と、横剥ぎ剥片を用い背面全面、腹面両側縁に二次調整のある2の、2点の範状石器が出土している。

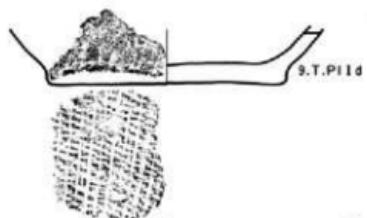
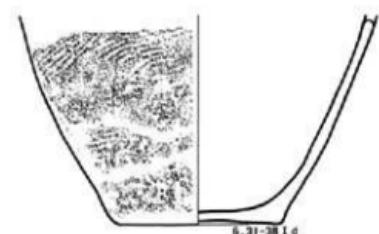
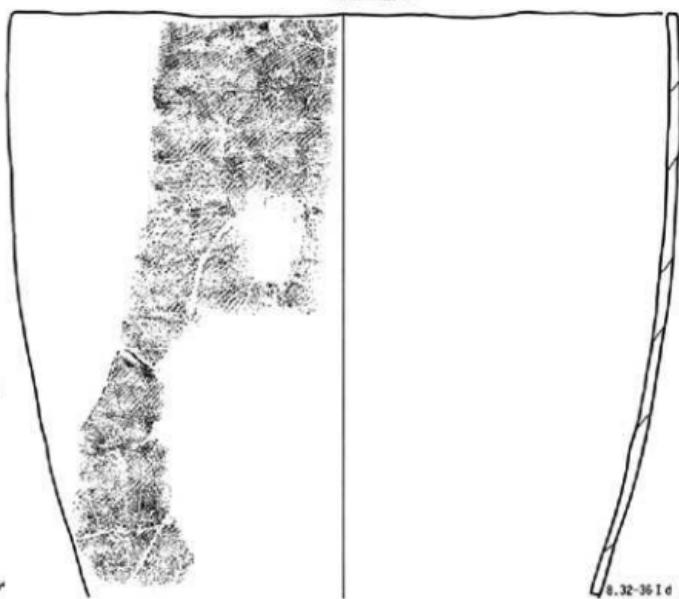
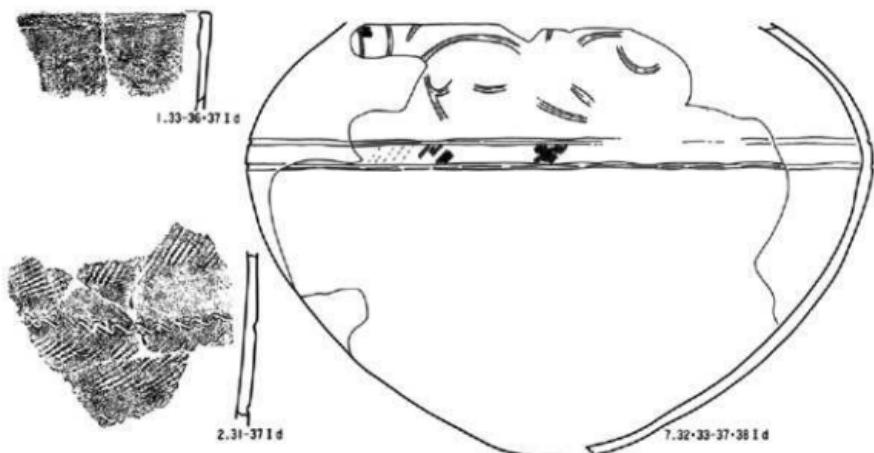


図版6

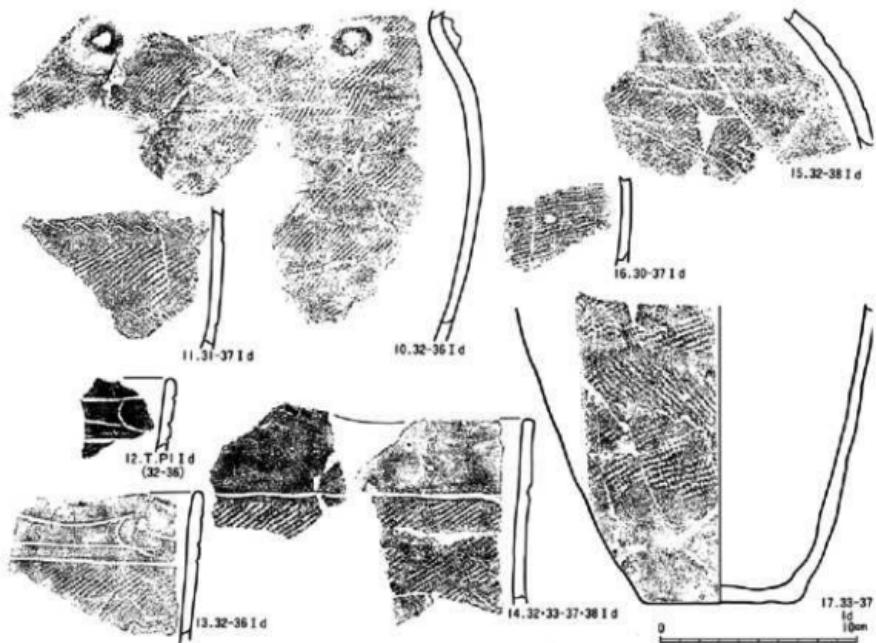
S D 1発掘状況(北から)



縄文土器出土状況



B区出土土器実測・拓影図(1)



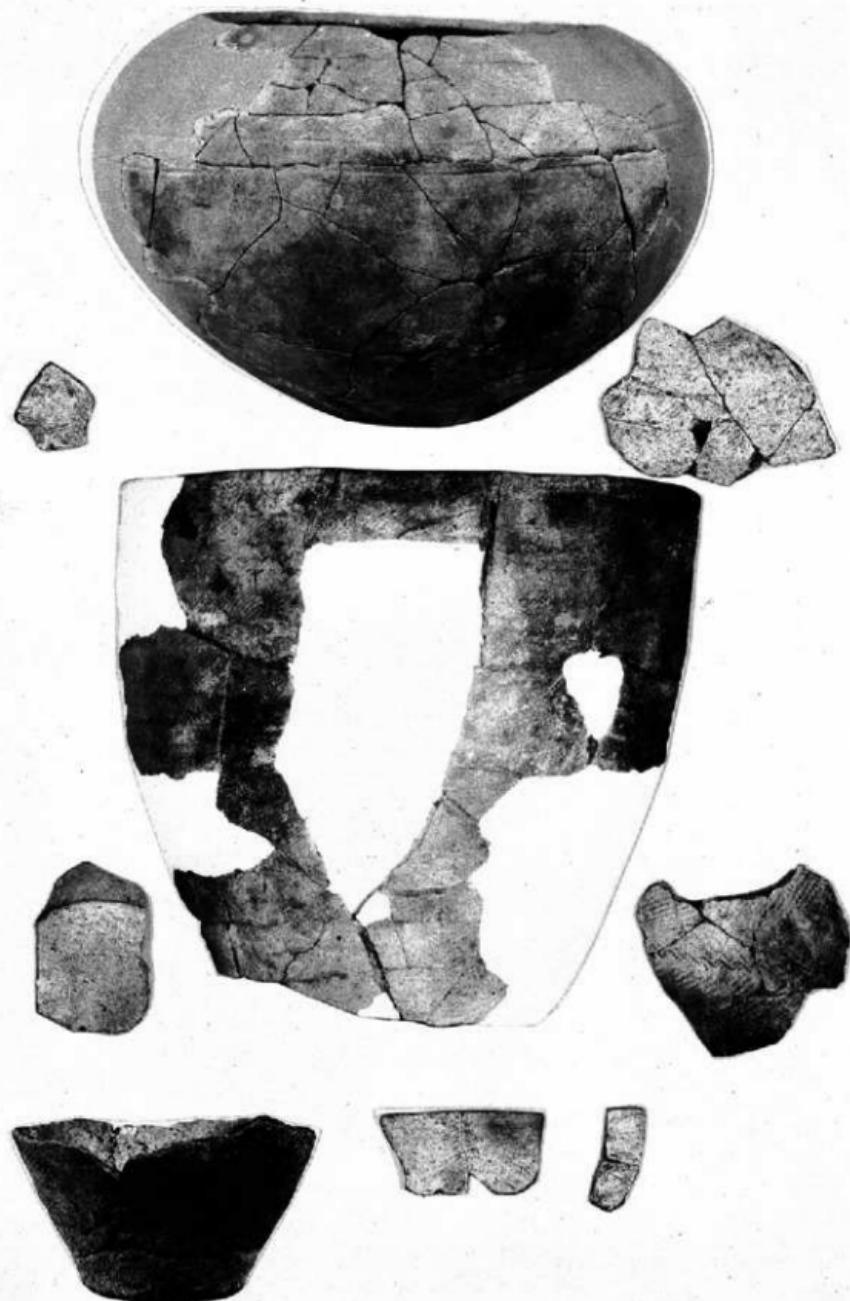
第8図

B区出土土器実測・拓影図(2)



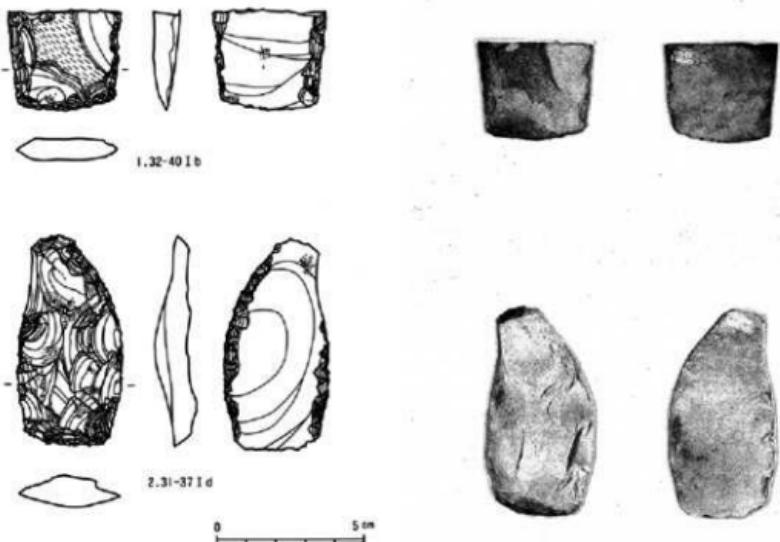
図版7

B区出土土器(1) (S=1/3)



図版8

B区出土土器(2) ($S=1/3$)



第9図

B区出土石器実測図 図版9

B区出土石器($S=1/2$)

V まとめ

- (1) A区はIII層まで精査を行なったが、遺構は検出されなかった。時期判定可能な遺物は大木9式期の深鉢形土器口縁部破片1点のみである。遺物の出土状況がまばらであり、何らかの作用による流れ込みと考えられる。
- (2) B区では開田の際に包含層及び遺構検出面が破壊されており、遺物も全てが盛土中からの出土で、もともとの位置をとどめない二次堆積である。土器には大洞B式期に比定できる半精製深鉢が出土しているが、他に時期認定しうる資料がなく、ここでは繩文時代後期から晩期の出土遺物として大きく捉えておきたい。

参考文献

- 加藤 稔他(1982)「村山市史別巻1原始・古代編」村山市教育委員会
 佐々木 洋治他(1979)「分布調査報告書(7)」山形県教育委員会
 長橋 至他(1984)「作野遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会

山形県埋蔵文化財調査報告書第131集

早房 D 遺跡

発掘調査報告書

昭和63年3月25日 印刷
昭和63年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 梶田宮印刷所
